

# 染香 ぜんこう

福泉寺寺報  
令和6年3月  
第122号  
毎月1日発行

ホームページ



お寺 LINE



子ども行事



## 「悲しみ」が「救い」でした

昨年我が家は葬儀が続き、年を越しましても、慌ただしく過ごしております。こんなことがありました。

一月に母の満中陰を終えたあと、ふと、「自分は母のことを無意識に思い出さないように過ごしてきたのかもしれない」と感じ、ある日の夜、コーヒーを入れながら、

「なんかさ、母の死を自分の心はまだ『消化』しきれないのかも」と坊守につぶやきました。すると

「あたりまえよ、当然じゃない」と涙を目に溜めて言うので少し驚きました。

「消化しきれない」、この感情についてお参り先で話すと、

「くよくよしたってしょうがないですよ」という反応の一方で、住職もですか、実は私もです、という具合に、涙を流される方もおられます。この何とも言えない『素敵な雰囲気』

は、母の贈り物であると受け止めています。今日はこの『素敵な雰囲気』について書いてみます。



母には、家族以外に涙を流してくれる「友」

がいました。職場の同僚です。母から生前、

その存在を聞いていました。生粋のカープ女子です。彼女とは今「ライン」でつながっています。彼女もまた、喪失感に耐えていることを知りました。

妙に聞こえるかもしれませんが、彼女の喪失感を知って、私は楽になりました。

連帯感、と呼ばれるものでしょうか。しかしそれは単に「しんどいのは自分だけではない」というものとは少し違うように思いました。

彼女の涙は、私のとは違います。けれど、家族ではなく友の涙ゆえに、わたしにとって母の存在はいよいよ「立体的」になり、私を「自分の殻」から解放してくれるような感じがありました。言うなれば、「母の新しい一面の発見」であり「(彼女の)悲しみが、(私の)悲しみを癒やしてくれた」のでした。

私の知らない母の姿から、じわりと、生きる力をもらったような感じがしました。

「感じ」ばかりの内容で恐縮ですが…、そのように感じたとき、これまたふと「慈悲」という仏教語が浮かびました。私たちの喜び、幸せ、優しさを根底でさせているのは「悲しみ」かもしれません。しばらく、この悲しみと付き合ってみようと思います。

(住職)

## 報恩講を身近なものに



【どんな行事なの?】

親鸞聖人のひ孫である覚如上人が、聖人の

三十三回忌のご法事にあわせて『報恩講私記』

を著されたことに由来しています。

簡単に申しますと、「親鸞様のご法事です」

「阿弥陀様と私の関係性を聞かせていただく行事です」

「法事でありながら楽しさも追求する行事です」というものです。

どうですか?少し興味がわいてきましたか。

(笑) 具体的な内容につきましては、今後の連載をお待ちください。

## ちょっと あたまの こりほぐし

A君とB君が果物を探しに森へ入って行きました。

A君はスーツ、B君は気軽なくつろいだ感じの服装です。

さて、どちらが果物を見つけたのでしょうか?

今月はヒントなし! 答えは裏面



(以前使われたパンフレットです)

## おてらより

### 春のお彼岸・永代経法要

日時: 三月二十日(水) 十四時

講師: 川田 信五 師

※みなさまお待ちかねの川田先生です!

専門用語をほとんど使われない、やさしい先生です。

※初めての方へ「お念珠」「普段着」で、

とっても楽な気分でお参りください。

「善は急げ」です。

### ホームページ、更新してます

少々サボりがちですが、お寺を身近に感じてくださればと思います。

### 境内の無縁墓を、整理します

今年の八月から随時進めてまいります。

引き続き情報のご提供をよろしくお願

いいたします。



タモリさんの話（二〇一四年三月）

彼岸が近づいてまいりました。彼岸には改めて御恩というものを静かに感じる仏事でもあります。

さて、この三月で永年続いていたお昼のテレビ「笑っていいとも」が終了するそうです。三十一年間、毎日続けられた番組は世界でも珍しいそうです。それだけ司会のタモリさんの魅力がそこにあったからだと思えます。

さて、タモリさんはもともと福岡市でサラリーマンをしていましたが、「天才バカボン」や「おそ松くん」で有名な漫画家・赤塚不二夫に見いだされ、東京へとやってまいりました。そして赤塚不二夫は自分の住んでいた高級マンションにタモリさんを住まわせ、自分は木造二階の家に移り越して、そこで漫画の仕事をしていたと言われます。赤塚不二夫は言うていたそうです。「タモリはめったにない笑いの才能を持っている。彼のような男に下積み生活させたら時間がもったいない。彼の才能にはこの生活がいいのだ」と。



これでいいのだ



それから十年後、タモリさんは全国で有名なタレントになりました。一方、赤塚不二夫の漫画は売れなくなってきました。するとある日、タモリさんがやって来て、「今度、自分の会社を設立したので会社の顧問になってくれ」と懇願したそうです。その顧問料として毎月三十万円ずつ赤塚不二夫の通帳にお金が振り込まれました。赤塚不二夫は周りに言っていたそうです。「タモリが架空の会社を作って、自分に顧問料をくれている」と。

またタモリさんは、赤塚不二夫に「あのベンツを一千万円で譲ってくれないか」とか「あのキャンピングカーを五百万円で譲ってくれないか」とかお願いしていたそうです。お金に困っている赤塚不二夫を傷つけないようにお金を回し続けたといいます。

そんな時、タモリさんと赤塚不二夫と一緒にお酒を飲んだ人がこんなことを記事に書いていました。赤塚不二夫が酔っぱらって、タモリさんに言ったそうです。「売れてると思っいい気になるなよ」とするとタモリさんは言い返します。「売れない漫画家にそんなこと言われたくもない」。

やがて二人は取っ組み合いのけんかになりました。赤塚不二夫がタモリさんの鼻の穴にピーナッツを入れると、タモリさんもアスパラにマヨネーズを付けて赤塚不二夫の鼻にねじ込む。あわてていた周りの人も「あれ、おかしいな」と思っ見ていたら、これもギャグだったので。二人はこのような関係で、「心配しているよ」とか「感謝しているよ」といった言葉や涙はいつさい無かったそうです。

でも、赤塚不二夫はタモリさんから届けられたお金には決して手を付けなかつたそうです。赤塚不二夫はある日ポツリと言ったそうです。「タモリのような芸人という職はいつ売れなくなるかも知れない。その時のためにこの金をとっておかなくては……」

もうすぐ終了する「笑っていいとも」ですが、最後までタモリさんは決して涙や感動的な叫びはないと思います。でも、いつも淡々としているタモリさんは、御恩というものに支えられ、そのことをしっかりと感じている人だと思います。だからここまで番組が続けられたのだと思います。

福岡義朝『赤光』令和四年七月

編集後記

今年、長女（撰）が中学に進学します。長男（仁）は小学三年生、次女（妙）は小学一年生です。気がつけば私も四十五です。どうりで肩が上がりにくくなりました。

子どもは「成長」で、親は「老化」です。だんだんと歳を数えるのが嫌になってくるという皆さんの気持ちが分かってきました。

でも、成長と老化の「境界線」はあるのです。うか。多分、思い込みなのだろうと思います。であるなら、無理やりにも前向きになって、「出来ないうことを嘆くよりも、出来ることを喜ぼう」なんていう気分です。今年度も、どうぞよろしくお願ひ申し上げます！

